

名もなき英傑の詩

高城飛雄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『やあ、またお会いしましたね。』

古の詩を求める旅もひと段落して、今はこうして娘たちと音楽で戯れています。

私には何の力もありませんが、この平穏がいつまでも続くよう、詩に願いを乗せていきます。

……ところで折り返してお願ひがあります。あなたにお聴かせしたい詩があるので、す。

もしよければ、後でもう一度ここに来ていただけませんか？

すみませんがよろしくお願ひします』

※『ゼルダの伝説 ブレスオブザワイルド』の独自解釈モノです。

カツシーワの師匠の生き様が格好良いので、「こういう裏設定だったら胸熱だなあ」と妄想してみました。

※P i x i vにも投稿しています。

目次

R e q u i e m	N o c t u r n e	S e r e n a d e	B o l e r o	M e n u e t	P r e l u d e
50	42	35	19	7	1

Prelude

お待ちしておりました。

来ていただいてありがとうございます。

実はあなたにお話ししたいことがあるのです。

少し長くなりますが構いませんか？

《はいですよ》

——ありがとうございます。

お話したいのは私の師匠についてです。

私の師匠はハイラル王家に仕えるシーカー族の宮廷詩人でした。

当時、王家には美しい姫様がおられ、師匠と年齢も近かったそうです。

気立がよく、慎ましくも勤勉で、王国に暮らす民へ尽くそうとする姫様は、人々から慕われていました。

宮廷詩人という立場にあった師匠は、そんな姫様と顔を合わせ、また言葉を交わす機

会もあつたと言います。

そしてかなわぬ恋と知りながら、師匠は恋に落ちてしまったのです。

ですが姫様はいつしかお付きの近衛騎士に想いを寄せるようになりました。

師匠は嫉妬しました。近衛騎士とて貴族や王族ではないのに、と。

そんな時、かの大厄災が起こったのです。

……師匠はこの厄災を鎮める勇者が必ず現れると信じて詩を作りました。

この詩はあなたにお聴かせしないとイケない詩なのです。

古の勇者ら 封印せし厄災

万年の時を経て ついに蘇る

ハイラルの近衛騎士 己が身をもって

姫巫女の盾となり 力尽き倒れる

その騎士を想い 姫巫女の力

ついに放たれ 厄災を城に封ず

近衛騎士 回生の祠にて傷を癒し

永き眠りから目覚めん

幾多の試練を乗り越え

力を取り戻せし その騎士

現世うつしよの勇者となりて 再び厄災うかつしよに挑み

姫巫女を 魔の手より奪還す

勇者と姫巫女 ともに手を取り

再びハイラルに 光を取り戻さん

師匠は大厄災の時、真つ先に故郷のカカリコ村に向かつて逃げました。

その途中、偶然体を張って姫様を守った近衛騎士を見たのです。

事の次第を知った師匠は決心しました。

厄災を封印した古の勇者の詩――。

これを調べていつか戻ってくる近衛騎士に伝えよう、と。

そして姫様を救っていたきたい、と。

それが私に遺した師匠の最後の言葉でした。

……近衛騎士殿、今は亡き師匠の詩、受けていただけますか？

《わかった》

——ありがとうございます。

あなたならきつとそう言っていただけと……。

姫様はたいそう美しい方だったと、いつも師匠から聞かされていました。

愛おしげに、けれど寂しそうに。

姫様のことを話す師匠はいつもそんな表情を浮かべていました。

師匠が最期まで気にかけていた姫様……。

私もぜひお会いして姫様のための詩を作って差し上げたいものです。

長い話に付き合っていたいただきありがとうございました。

《その人のことを知りたい》

——え、師匠についてですか？

……そうですね。

実を言うと、師匠はあまり自分のことを話してはくれなかったのです。

何か理由があったのだとは思いますが。

大厄災から百年もの間、師匠は故郷のカカリコ村に帰ることすらなく、ひたすらに古の勇者について調べていましたから。

名前すら、しばらく師事してようやく教えてもらえたくらいです。

むやみに教えることのないように言い聞かされました。

ですが、近衛騎士殿になればお伝えしても構わないでしょう。

師匠が待ち望んだあなたになら。

師匠の名前は——《シーク》といます。

Menuet

おお。リンク。よく来たの。

疲れておるのならば、遠慮なく村で休んでいくことじゃ。

急いで事は仕損じる、ともいうからの。

焦る必要はなからうて。かつての力を取り戻し、四神獣を解き放った其方ならば、必ずやハイラル城に巣くう厄災を討ち、姫様を救うことができるはずじゃ。

しかと準備を整えるのじゃぞ。そのための協力は惜しまぬからの。

して、なにか用があるのかの？

我にできることであればいくらでも力になろう。遠慮なく言うてみるのじゃ。

《シークという人について知りたい》

——なに？ シーク、じゃと？

其方、その名をどこで聞いたのじゃ。

あやつの名を知る者はほとんどおらぬはず。知っておるのは我とプルア、そしてロベリークくらいなもの。あやつ自身もそう易々と語らぬはずじゃが……。

《じつは……》

——なるほどのう。あやつの意志を継ぐ者が。

近頃は気配を感じられぬと思うておったが……。

そうか。あやつは逝ってしまったのじゃな。

……ならば、話さねばなるまい。

あやつは決して良い顔をせぬだろうが、今となつてはよかろう。

《シーク》

その名は我らシーカー族にとって唯一無二の名じゃ。

古より伝わる技を磨く者の内、最も優れた者に与えられる名。

過去を捨て、己を捨て、生来の名すら捨てた者のみが授かることのできる名。それが《シーク》という名なのじゃ。

この名の始まりは遙か昔の神話にまで遡る。

当時、厄災と対峙する勇者と姫巫女には、幾人もの協力者がおつた。

姫巫女に従い、その力を支える賢者と呼ばれる者たちがそれじゃ。

そして勇者を導き、陰よりその身を守る者もおつた。

伝承されしその名こそ《シーク》。

シーカー族の若者にして、勇者を導きし同胞。ほらから

当時の厄災討伐以来現れることのないこの名を、一族の祖は証の名としたのじゃ。

百年を経た今でも忘れぬ。

98代を数える歴代の中で、あやつは最も早くにその名を授かったのじゃ。

年の頃は其方と変わらぬじやろう。其方が若くしてハイラル一の剣士と呼ばれたように、あやつも若くして一族の技を極めておつたのじゃ。

一族の技とはすなわち、影に潜み、闇を駆け、音も無く仇を討つ技じゃ。

あやつはおそらく、光の下では其方に適うまい。

じやが、こと影の中において並ぶ者のない使い手じやった。

とはいえ、一族の技は公にできるものではなくての。

末代の《シーク》となつたあやつも、それだけで名を得たわけではなかつた。

其方も聞いたのじやろう。あやつの表の顔を。

百年前、あやつはハイラル王家に仕えておつた。

表向きは宮廷詩人として城に滞在し、陰ながら王族を守る務めを果たしておつたのじや。

其方も顔を見たことくらいはあるかもしれん。

あやつはそなたが英傑の任を与えられた催事にも参列しておつたしの。

覚えはないか？

ほれ、銀の髪に赤い瞳おのこの男じや。

……そうか。まだ催事については何も思い出せぬか。

いや、焦る必要はなからうて。じきに思い出すじやろう。

ともかく、あやつは其方や姫様と同じ時代に生きておつたのじや。

懐かしいのう……。

あやつは豎琴が得意での。折に触れては詩を奏でておつたわ。

もしもあやつが《シーク》の名を与えられておらねば、真の宮廷詩人となっておった
かもしれん。

それほどまでにあやつが奏する詩は他の者を魅了する力を持つておったのじや。

ふむ。そういえば……。

なに、豎琴といつて思い出したのよ。

以前、姫様が語られておったことでの。

城での会議の折、あやつが奏でた詩に助けられたというのじや。

あれは、其方がお付きの騎士に任命される前のことじやった。

その日、ハイラル城では占い師のもたらした予言についての会合が行われておった。

占い師はかつてない剣幕で厄災の復活と遺物の存在を知らせての。伝承と同じ厄災の予言に、ハイラル王家は色めき立っておったのじゃ。

結果、議会は予言を支持し対策を講じようとする者と、あくまで伝説に過ぎないと切り捨てようとする者の二つに分かれた。

話し合いは長きにわたり、議論はやがて激論に変わった。

「占い師の言葉なぞ信用なるものか」

「王国の危機となるやもしれんのですぞ」

「一万年も前の伝承なぞを鵜呑みにして国費を費やそうなど正気の沙汰とは思えぬ」

当時のハイラル王にもすぐには結論を出せんでな。双方の主張はどちらも王国のたぬを想ったものでありながら、ぶつかるばかりじゃった。

じゃが、来る日も来る日も論を交わし、精神の負担が大きくなると、やがてその矛先は少しずつ別の方向へ変わり始めた。

「仮にその厄災とやらが蘇ったとして、それは剣一つで解決するようなものなのだろうか？ であれば、軍の部隊を差し向ければよいだけのことではないか」

「しかし、厄災を討つには伝承にある剣と、加えて、もう一つ……」

憤懣ふんまんの矛先は、次第にゼルダ様へと向けられた。

そなたも姫様が苦しんでおられたことは知っておろう。

母君を早くに亡くし、独学での修行を続けておられたものの、なかなか封印の力に目覚めることはできんでの。貴族たちから心ない言葉を向けられることもあったのじゃ。

このときも、苛立つ貴族たちにとって姫様は格好の的だったのじゃろうて。

「ふむ。それでは厄災を討つことはできそうにないですな」

「まったくですな。退魔の剣とやらはともかく、肝心の封印の力がないのでは」

故に、遺物研究に反対する者のみならず、伝承を信じる者たちからも心ない言葉を浴びせられたのじゃ。

その勢いはハイラル王も止めることはできなんだ。

「陛下、お聞き及びの通り、占い師なぞの言葉に惑わされてはなりませんぞ」

姫様はさぞや苦しかったことじやろう。封印の力を得るための修行は欠かさず行われておったし、その上で自ら古文書を読み、遺物への理解を深めておられた。

未だ真偽の定まらぬ予言に対して誰よりも真摯に対策を講じておったのは、他ならぬゼルダ様なのじゃ。

議會を覆う空気は、そんな姫様を嘲笑うかのようじやった。

やがて、伝承に否定的な者たちの一人が王の前に進み出た。

「仮に。仮に、占い師の言葉通り、厄災とやらに抗するための遺物なる物があつたとしま

しよう。ですがそれも要となる存在が欠けている以上——」

もし彼の者がその先を口にしておれば、議会在その者の言葉を受け入れておれば、遺物の発掘は数年もの間遅れることになったやもしれん。

じゃが、そうはならなかつた。

議場に吹きこむ風と共に、どこからか琴の音が響いてきたのじや。

渦巻く負の情念を洗い流すかのような音色じやつた。

単調でありながら心惹かれる音色に、姫様をはじめその場にいた者たちは不思議と心穏やかになつたのじや。

あれほど高揚し、姫様を悪し様に言つておつた者たちはみな我に返り、一様に己の失言を詫びたという。

姫様自身も、無力感に苛まれていた心が軽くなつたのじやとか。

会議の後、姫様は琴の奏者を探された。

あやつは窓の傍に佇んでおつたそうじや。

ほんのわずかに窓を開き、狭い足場に腰かけ、穏やかに琴を弾いておつたという。

これが姫様と、宮廷詩人として城に入ったあやつとの出会いじゃった。

あやつはこのときに奏でた詩を『いやしの詩』と呼んでおったそうじゃ。

とある地方に古くから伝わる詩で、魂に安らぎを与える詩じゃとな。

この詩に限らず、あやつは他者を魅了する様々な詩を知っておった。

時には、牧場の香りを思わせる詩を。

時には、荒れ狂う嵐を思わせる詩を。

時には、穏やかな眠りへ誘う詩を。

時には、微睡むものを揺り起こす詩を。

暁や黄昏を思わせる詩もあつた。

深き森を、燃え盛る山を、海の潮騒を、砂漠の風を思わせる詩もあった。あやつが様々な書物、伝承を知り、奏でる詩はどれも並々ならぬ力を持つておった。そうした知恵と技を持つておったが故に、あやつは《シーク》の名を継ぎ、宮廷詩人としてハイラル城に入りえたのじや。

《大厄災のときも城にいた？》

——む？ おお、そうじやの。

確かに、あやつはかの大厄災に立ち会つておった。

生き残り、其方が目覚めた時のためにと、この村を出たのじや。

じやが、すまぬの。

我はあの日、あやつがどこでなにをしておったのかは知らぬのじや。

百年前、我はこの村におつたのでな。

城で起きた出来事は伝え聞いただけなのじや。

大厄災の折になにをしておつたのかは、あやつ自身語ろうとせんでな。

して、あやつの後継者からはなんと聞いておる？

《逃げたと聞いた》

——ふむ。なるほどのう。

おそらくじやが、其方の聞いた話は真実ではないと我は思う。

あやつが姫様を顧みることなく逃げ出すなど、ありえぬことじや。

己の弟子にすら真実を語らなかつた理由は、我にはわからぬ。

あやつは大厄災の直後に村を発ち、二度と戻らなかつたからの。

古の勇者の足跡を辿る——。

そう言い残して、あやつは村を去つたのじや。

各地へ散つた者たちからも、あやつを見たという報せは受けておらん。

そうじやな……。

プルアであればなにか知っておるやもしれぬ。

あやつは大厄災の折、プルアやロベリーと共にハイラル城におつたのじや。

もし、あやつについてより詳しく知ろうと思ふのなら、プルアを訪ねるがよからう。

じやが、リンクよ。心するのじや。

あやつが何故、己の弟子にすらも一切を語らずに逝つたのか。

あやつが何故、其方を導く詩を遺すため、その生涯をかけたのか。

そして何故、未だ其方があやつの顔を思い浮かべることができぬのか。

いかなことを知ろうとも迷わぬよう、心するのじやぞ。

Bolero

チエツキー♪ いらっしやーい。

リンクつてば久しぶりー。元気してたー？

なんだかちよーっと見ない間にすっかり元通りたくましくなっちゃって。

神獣もみんな取り戻せたみたいだし、もういつでもハイラル城へ行けるねー。

でもせっかく来てもらつて残念だけど、アタシにできる事はもうないかも。

なにしろ百年かけて研究した成果はもう全部渡しちやったからねー。次はざつと十年後くらいかな♪

それで、今日はどんなご用件かな？

お茶ならシモンが出すし、お話ぐらいならできるけど。

《聞きたいことがある》

——なになに、聞きたいこと？

ムッフツフー。いいいいいよ。なんでも訊いてちょうだいな♪

《シークという人について》

——えっ？ シーク？

あちゃー。アンタ、とうとうカレのこと聞いちやったのね。そっかそっか。

ま、知らないままでいるのもよくないかもだし、いいよ。

アタシが知ってることなら教えてあげる。

それでカレについてのなにか聞きたいのかな？

身長体重？ 趣味？ 好き嫌い？ それとも子どもの頃の恥ずかしエピソード？

………違う？ そうじゃない？

もつと大事なことが知りたいって？

わかってるわかってる。ちよつとした冗談よ。フムフム、少なくとも野次馬根性ではないのね。

ホイ、それじゃあ改めて、リンクはなにが知りたいのかな？

《大厄災のときのこと》

——大厄災のときにカレがどうしていたか、ねー。

うーん。話してもいいけど、あんまり楽しい話じゃないと思うよ。

特にリンク、アンタにとっては知らない方がいい話かも。それでも聞きたい？

《聞きたい》

——そっか。わかった。

いいよ。そこまで言うなら、話してあげる。

アタシとしても、カレのこと知ってもらえるのは嬉しいしね。

んじゃ、まじめに話そっか。

大厄災のときのことを話すなら、それまでカレがなにをしていたかも知ってもらおう必要があるかな。カレの任務がどんなものだったか、とかね。

彼がハイラル城で暮らしてたって話はもう聞いた？

うん。そう。宮廷詩人として。

宮廷詩人っていうのは、古い文献に載ってる伝承なんかを詩にして聞かせたり、食事や会合の席なんかで楽器を演奏したりする仕事ね。

カレは調べ物が好きだったし、ハーブも抜群に上手かったから、《シーク》としての表の仕事に宮廷詩人はびつたりだったの。

カレ自身もよく『こつちの方が性に合ってる』って言ってたなー。

で、それじゃあ裏の仕事——本当の任務はなんだったのか。

ひとつは、王族の護衛。ハイラル王と姫さまを陰ながら守る役目。

特に姫さまはハイラル王の名代として各地を回ることも多かったから、カレも同行して姫さまの身を守ってたの。

——そのことを姫さまは知っていたのかって？ 知らなかったと思うな。

もちろん、姫さまも《シーク》の名前が持つ意味は知っていたし、カレが王族の護衛をしているってことも知っていた。

でも城の外でも守られているとは思わなかったんじゃないかな。

カレは姫さまの身に危険が及ぶことはもちろん、それで姫さまの表情が曇ってしまう

ことが嫌だったみたい。

だから多分、姫さまや護衛の騎士が気付かない間に片づけちゃってたんじゃないかな。襲ってくる中には魔物だけじゃなくて、イーガ団みたいな刺客もいたから。

でも、それを注意されたこともあったみたい。それもあのウルボザに。

なんでも姫さまがハイラル王の名代でゲルドの街に行つたとき、姫さまとウルボザが二人だけで街の外に出たらしいんだ。夜の砂漠に、だよ。

当然、イーガ団の刺客が姫さまを狙って動き出したわけだけど、カレが阻止しようとしたらウルボザに視線で止められたらしいんだ。

見つかつてることに気付かなくてシヨックだつたつて、けつこう落ち込んでたなー。

結局、刺客はウルボザがまとめて追い払つて事なきを得たんだけど、後でカレも「過保護すぎる」って怒られたんだつて。姫さまの危機感が育たないから、裏で全部片づけるのはよくないつて。

まあ、その後もカレはやり方を変えなかつたから、姫さまのちよつと無謀なところは治らなかつただけどねー。アンタもその辺りは覚えがあるでしょ？

王族の護衛の任務は、カレが《シーク》の名を継いでから二年ぐらい続いたわ。

リト族、ゴロン族、ゾーラ族、ゲルド族の英傑が決まつて、ハイリア人の英傑——ア

ンタが姫さまお付きの騎士に任命されるまで。

ハイラル王国一の剣士がお付きの騎士に任命されて、カレは姫さまの護衛から外された。

それまで姫さまの身を守ってたのはカレだったけど、公にできる立場じゃなかったからアンタに役目を譲ったのよ。

——カレはどう思ってたのかった？

そうだね……。

正直に言うと、カレはアンタのことを嫌ってた。ううん、嫉妬してたのかな。

それまでずっと、姫さまを守ってきたのはカレだった。

カレは誰より姫さまの身を案じていたし、姫さまの力になりたいと願ってた。

でもカレの立場上どうしても付いていられないときもあつたから、常に傍にいて身を守るお付きの騎士は必要だつて、納得はしていたわ。

それでも、最初はアンタのこと散々に言っていたのよ。

配慮が足りないだとか、なにを考えているかわからないとかね。

でもアンタがお付きの騎士に任命されてしばらくして、姫さまがアンタに打ち解け始めてからは、カレもなにも言わなくなつた。

姫さまがアンタと話している姿を、遠くから眺めているだけだった。

……話が逸れちゃった。イケナイイケナイ。

カレのもう一つの任務について話してなかったね。

それまでの姫さまの護衛について任務はアンタが来てなくなった。

ハイラル王の護衛には近衛騎士が何人も就いてたし、王自身は城からほとんど出なかつたから、王族の護衛っていう任務は必要なくなったの。

だからカレは表向きの宮廷詩人を続けつつ、もう一つの任務——諜報と暗殺の任務が中心になったわ。

さつきも言ったけど、当時からイーガ団は活発に動いていて、刺客を差し向けてくることも少なくなかった。

あいつらは変装の達人だから、ハイラル王も対応に困ってたのよね。

そこで、ハイラル王はシークたちに密命を下したの。

イーガ団のアジトを突き止め、一網打尽にするようにってね。

驚いた？ ハイラル王もけっこう過激な任務を出すでしょ。

でも、それはずっと昔からあったことなの。

アタシたちシーカー族は遺物の調査とか研究もするけど、元々はハイラル王家の影。

表に出せない裏の仕事を担ってきたのよ。

イーガ団の殲滅もその一つ。カレはその任務の中心だった。

当然よね。だってそのための《シーク》なんだから。

本来のカレは穏やかで大人しい性格だったけど、心を殺して任務に臨んでいた。

大厄災の日も、カレは任務に出ていたわ。

突き止めたばかりのイーガ団のアジトへ潜入調査を行う予定だった。

でもガノンが城に現れて、カレはすぐに城へ戻ったのよ。

突然のことだったわ。

一切の前触れもなく、地震と共に現れたガノンの暗雲がハイラル城を覆ったの。

アタシは城にいたし、目の前でガーディアンがガノンに乗っ取られちゃうのも見たから、異変には真っ先に気付いた。

アタシはロベリーと協力して、出来るだけ多くのガーディアンの脚を切り離して、動けなくして回つてた。

でもすぐに他のガーディアンが集まってきて隠れるしかなかった。

悲鳴が聞こえた。怒号も聞こえた。

けどそれ以上に、ガーディアンが城を、街を襲う音が聞こえた。

なにもできなかつた。

アタシもロベリーも、ただじつとしていることしかできなかつた。

どうにかしたい気持ちはあつたけど、頭の冷静な部分が衝動を押し留めていた。

知識と技術のあるアタシたちがやられちゃうわけにはいかないってね。

半日くらい経つた頃、アタシたちが隠れていた小部屋にカレが現れた。

「無事かい、二人とも」

「シーク！」

「こいつは驚いた。ユーも無事だったんだな」

カレは私たちを引つ張り出すと、廊下を先導して歩いた。

「バイザウエイ、シックはどうしてここに？ 任務中だったんじゃないのか？」

「ガノンが現れたのを見て、引き返してきた。それにナボリスも動いてたから」

「つまり、ゼルダ様たちが動き始めたから助けに来たってこと？」

「ああ」

アンタやゼルダ様が厄災討伐に向けて動き出したなら、決戦の場所はガノンのいるハイラル城になる。カレはそう考えて城へ戻ってきたの。

神獣を動かしてガノンに攻撃して、弱らせたところをアンタとゼルダ様で倒す。

その邪魔をされないようにって考えたんだと思うわ。

けど、城の外へ出たアタシたちは信じられない、信じたくない光景を目にした。

ラネール、オルデイン、ヘブラ、ゲルドの四方から、一方的な攻撃が城下町に浴びせられていた。おぞましい唸りを上げる四神獣の眼は赤黒く光っていたわ。

カレは呆然とその光景を眺めていた。

「……………どう、して」

力なく呟くカレとは違って、アタシとロベリーは予想がついていた。

ガノンにガーディアンを乗っ取る力があるなら、神獣たちもそうならないとは言えな

い。

もしそうだとすれば、あそこに乗り込んだ彼らはもう……。

アタシはじつと佇むカレになんて声をかけたらいいかわからなかった。

神獣に乗った四人はカレにとつても仲間だったし、リーバルとは特に仲が良かったみたいだから。

表情はわからなかったけど、メドーを見上げるカレの背中はずごく小さく見えた。

とはいえ、じつとはしていられなかった。

すぐにロベリーが声を上げたから。

「ヘイ、ユーたち、あそこを見ろ」

指さした方向を見ると、遠くでガーディアンの群れが並んで走っていた。

まるで獲物を探す肉食獣みたいに、周囲へ目玉を巡らせながら南東へ向かっていた。

カレも気を取り直してそっちを見て、ガーディアンの様子が少し違うと気がついた。

「誰かが追われている？ ……姫様！」

叫びながら、カレは飛び出した。

ほとんど同時にアタシも気付いて、ロベリーと一緒にカレを追いかけたわ。

残っていたガーディアンに見つかるのも構わずに走って、ガーディアンの群れと、その先にいるアンタとゼルダ様を追いかけた。

幸い、城にいたガーディアンは追ってこなかったわ。

雨が降っていたお陰で徘徊するガーディアンに見つかることもなかった。

昼間だつていうのに黒い雲が空を覆っていて、薄暗い中を南東——カカリコ村の方角へ走った。

平原を越えて、川を渡ったところで、前を走るガーディアンの群れが見えてきた。

数えるのも嫌になるぐらいだったわ。

並の兵士じゃ束になつても敵わない古代の兵器がぞろぞろと。

これが一気に押し寄せたら、いくらアンタでも太刀打ちできないって思った。

きつと、カレもそう思ったんでしょね。

だから群れを見下ろせる高台まで来たところで、こう切り出した。

「二人はこのままゼルダ様を追ってくれ。ぼくはここで、あいつらを足止めする」
無理だと思った。

いくら《シーク》だといつても、シーカー族の技は複数の相手に、ましてや見通しのいい場所を通じるものじゃないから。

けれど口を開きかけたところで、横から伸びた手に止められてしまった。

「オーケー。ならこいつを持っていけ」

左手でアタシを制したロベリーは、ポーチから三本の矢を取り出した。

「これは？」

カレが受け取ると、あいつはバカみたいなドヤ顔で言ったわ。

「ミーが開発した対ガノン決戦兵器の一つ。『古代兵装・矢』——の試作品だ」

ただの矢じゃない。それは一目瞭然だった。

青く光る金属なのか石なのかわからないものが先端に取り付けられていて、ゆらゆらと周りの空気が揺れていた。

アタシは一瞬で仕組みを理解したわ。

「……偉そうに言っつて、ただガーディアンンの武器を装着しただけじゃない」

「チツチツチ。そいつはパワフルでグレートな逸品なのさ。なにせ大抵の魔物はイチコ口にできる上、上手く狙えばガーディアンもブレイクできるんだからな」

「へえ、それはすごい」

「だろう？ 試し撃ちしたときもすごいパワーでな。研究用のガーディアンが一発で吹っ飛びまっつて……」

ロベリーはそこで口を噤んだけど、手遅れだったわね。

あいつが振り向いたときにはもうアタシは手を出していたもの。

「この前の犯人はあんたかー！ 貴重な研究資料ぶっ壊してんじゃないわよ！」
「イテテ！ ギブ、ギブアツプ……！」

そうやってアタシがあいつの首を絞めるのを、カレは笑って見てた。
楽しそうに。ほんとに楽しそうに笑ってた。

声を殺して笑うカレの赤い瞳が、潤んで揺れていた。

たぶん、わかってたのよ。

締め上げたロベリーの目からは涙が流れていたし、アタシも景色が滲んでいたから泣いていたんだと思う。

ここで別れたら、もう二度と会えない。

なんとなくそれがわかったから。

アタシとインパ、ロベリーとカレの四人は幼馴染で、仲も良かったし。

こんなやり取りはもうできないんだろうなーってそう思ったら、ね。

カレはひとしきり笑うと、小さく息を吐いて背を向けた。

あいつが渡した矢を矢筒に収めて、口元のマスクを引き上げて、短く言ったわ。

「じゃあ、ゼルダ様をよろしく」

それきり、カレに会うことは二度となかった。

ハイ。というわけで、ここまでがアタシの知ってることよ。

あの後、アタシとロベリーはリンクとゼルダ様を追いかけて、アンタを庇ったゼルダ様が封印の力に目覚めた瞬間を見た。

それから瀕死のアンタを回生の祠まで運んで、姫様から預かったシーカーストーンで祠を封印したの。

で、みんながカカリコ村にいたらもしもの時に困るってことで、アタシとロベリーは

別々の場所に研究所を構えたってわけ。

どう？ わかった？

《シークには一度も会わなかったの？》

——うん。会ってないわよ。

アタシとしては会いたかったけど、カレにはやることがあつたみたいだしね。

カレがあれからどこでなにをしていたのか……。

それを知っている人、アンタには心当たりがあるでしょ？

Serenade

おや？ あなたは……。

ここで何を？

……いえ、旅の目的は人それぞれですね。

そんな事よりもこの石碑、いや、驚きました。

師匠の未完の詩に出てくる石碑が、今まさに目の前に……。

《未完の詩？》

——そうなんです。詩はほぼ完成していたのですが。

残念ながら、重要な章を作り終える前に師匠はこの世を去りました。

私はその章を紡ぎたいと考え、彼が残した詩に登場する地を巡る事にしたのです。

ああ。詩に登場するまさにその地で詠えるという贅沢……。

師匠が完成させていた、試練に挑みし英傑ミファアの章——。

どうぞ、お聴きください。

水を天へと噴き上げしは 清き湖のルツタ

繰り手にならんとするは 優しき英傑

聖なる力 高めるべしとの声を聞き

石碑に刻まれし 試練の地を巡らん

一つは 光の道を進み

一つは 古代のからくり兵を退け

一つは 滝に掛かりし光輪をくぐり

聖なる力を高めし英傑 次なる試練に挑まん

……いかがです？

試練に挑みし英傑の章でした。

私の師匠も、おそらくこの地で先ほどの章を詠ってみたはずですよ。

ああ。師匠の遺志を継いで詩を完成させ、晴れて詠う事ができたなら……。

そのためにも私は、英傑たちの事をよく知っておきたい。

ありがたい事に、ゾーラの里の王と王子から英傑の逸話をお聞きすることができました。

完成させた詩をこの空の下で詠う事。それが私の旅の目的です。

《師匠について聞いてきた》

——師匠についてなにかわかったのですか？

ぜひ聞かせてください。

弟子としてだけではなく、師匠の半生には興味がありますので。

《実は……》

——なるほど。そうだったのですか。

師匠は宮廷詩人だというだけでなく、シーカー族の戦士でもあったのですね。

思えば師匠の身体にはいくつかの傷痕がありました。

本人は事故で負ったものだとおっしゃっていましたが、隠さなければならぬ立場にあったのならそれも理解できます。

それで、大厄災の後に師匠がなにをしていたかでしたね。

以前にもお話した通り、師匠は大厄災の後、古の勇者について調べていました。

いずれ目覚める近衛騎士殿のため。

そしてハイラル城におられる姫様のため。

古の勇者の伝承を調べ、詩にして残したのです。

一万年前の伝承を辿る旅は困難を極め、師匠はその生涯を調査と詩作に費やしました。

私が師事した時にはもう師匠はかなりの高齢で、各地に点在する古の詩については既に完成させていました。

だから私は師匠亡き後も近衛騎士殿に詩を伝えられるよう、古の詩を学んだのです。

古の詩を伝え終えた師匠は、それから新たな詩の製作に取り組みました。

そうです。

先程あなたへお聴きいただいた未完の詩——。

師匠は晩年、あの詩の製作に取り組んでいました。

ですがお話しした通り、詩が完成する前に師匠はこの世を去りました。

基本的な旋律と詩の大半は完成していたのですが、最も重要な章は未完成なまま。だから私は、師匠の遺志を継いで詩を完成させたいと思うのです。

《ずっと詩を作っていた？》

——ええ。師匠はとても熱心な方で、一日の大半を詩作に費やすことも多くありました。机に向かつていないのは食事の時間と、あとは祈りの時だけでしょうか。

《祈り？》

——はい。夕刻になると女神像に向かって祈りを捧げるのが師匠の習慣でした。

それはもう毎日。嵐の日も雪の日も変わらず。

日暮れ時には必ず家の外に出て、女神像の前で祈るのです。

女神を信仰する風習は各地にあります。中でも師匠は敬虔な方でした。

亡くなる間際にも、師匠は女神への祈りを口にしていましたね。

ところで……。

私、一つだけわからないことがあるのです。

師匠はなぜ、生涯を賭けて勇者への詩を残そうと決意することができたのでしょうか。

大変言い辛いことではあるのですが、先程のあなたの話を聞く限り、師匠はあなたへ決して良い感情を向けてはいなかったと思います。

にもかかわらず、師匠はいつか目覚めるあなたのために詩を残そうと決意しました。

その意志は、どこから来ていたのでしょうか。

どのような想いを原動力としていたのでしょうか。

師匠が姫様へ想いを寄せていたのはわかります。

ですが、それだけで一生を掛けようと思えるものでしょうか。

かなわぬ恋——片想いであると知りながら、百年の時を殉じることができるとは
か。

今は亡き師匠に理由を訊ねることはできません。

存命の間に訊ねても答えてはくれなかつたでしょう。

ですが、私は師匠の想いを知りたい。

未完の詩を完成させるためにも、師匠の想いについて知る必要があると……。

私はそう思うのです。

長々と付き合わせてしまい、すみませんでした。

またなにか師匠についてわかることがあれば、教えてくださいますか。

私の方でも、師匠について調べてみようと思えますので。

では、よろしく願います。

Nocturne

おお、リンク。

このような夜更けにどうしたのじゃ。

今宵は月がよう美しく見えるでな。

我もこうして夜風に吹かれ、ひと時を過ごしておったのよ。

さて、其方は明日、神獣にまつわる試練を受けに行くと言っておったな。

それは真の勇者に向けたもの。かつてないほどに厳しい試練となるじゃろう。

心を強く持ち、己と真摯に向き合うのじゃぞ。さすれば我らが祖も認めてくれるじゃろうて。

……ふむ。なにやら問いたげな顔をしておるのう。

遠慮することはない。言うてみるのじゃ。

《実は……》

——あやつが何故、生涯を賭けて詩を遺したか、か。

そうじゃのう。あやつが黙しておったのなら、語るべきではないのかもしれないが

……。

《聞きたい》

——わかっておる。そう急せいでない。

……では、少々昔話をしようかの。

あやつと姫様が初めて会ったときの話じゃ。

それはあやつが五つの時のことじゃった。

当時、遺物の調査をしておった両親に連れられ、あやつはハイラル城を訪れた。王への謁見の後、調査団は詳細を話し合うために会議室へ籠ってしまつての。一人残されたあやつは庭に出で、そして姫様に会つたのじや。

見知らぬ場所に一人残され、さぞ心細かつたことじやろう。

あやつは人目を避けるように庭へ出で、そこで花を摘む姫様を見た。姫様も花園を訪れたあやつに気がつき、声を掛けたのじや。

「あなた、だあれ？」

「ボ、ボクは……」

「《——》！　かわいい名前ね！」

このときはまだ母君もご存命での、ゼルダ様はいつも笑顔を浮かべておつた。

「ねえ、私とお話しましょー!」

姫様は幼い頃から好奇心が強くての。何度も何度もあやつに問いを投げかけた。あやつは逆に引つ込み思案じやったから、姫様の問いに答えるばかりじやった。

姫様にとって、それは好奇心を満たすための一幕に過ぎなかつたじやろう。

じゃが、あやつにとってはかけがえのない時間じやった。

そのうちに、このような問いがなされた。

「ねえ、あなたは何が好きなことってある? 私はお花を育てるのが好きなの。とつてもきれいで、ちゃんと育ったときはすっごく嬉しいのよ」

「ボクは……ハープを弾くのが好き、だよ」

「ハープ! あなたハープが弾けるのね! ぜひ聞いてみたいわ! ねえ、なにか弾いてみせて!」

「う、うん。わかった。じゃあ……」

あやつは物心ついた時から琴に触れておつての。

故にあやつは幼くして、とある詩だけは達者に奏でることができたのじや。

女神のしもべに 導かれし若人

空と大地を結び 光もたらず

若人 2つの大いなる羽を

光の塔に導く 彼の者の前に

道はひらけ 詩の響きを聞く

あやつの詩を、姫様は静かに聞いておった。

そして詩が終わると、深く息を吐き、笑った。

「すてきな詩……。それにハープもすごく上手ね」

褒められたときのあやつの反応はわかりやすくての。

顔を赤く染め、琴を抱えるように俯いたのじゃ。

「そんな……。ボクなんて全然上手くないよ」

「ううん。そんなことない。私、とつても感動したもの。ねえ、今の、なんていう詩なの

「？」

あやつは恥じらいながらも、誇らしげに答えておった。

「今のは『女神の詩』。ずっと昔から伝わる、女神さまを讃える詩、なんだって」

「『女神の詩』……。不思議ね。初めて聞くはずなのに、なんだか懐かしい気がするの」
胸に手を当てて呟く姫様を、あやつは呆けたように見つめておった。

やがて時は過ぎ、姫様は母君に呼ばれて立ち上がった。

「いけない、お母様が呼んでる。それじゃあね」

「あっ……き、きみの名前は？」

「私はゼルダ。また、詩を聞かせてね。約束よ！」

わずかな時間の、些細な触れ合いじゃった。

じゃがあやつにとつて、それはかけがえのない瞬間だったのじゃ。

以来、あやつは益々琴の練習に励んでの。

瞬く間に村の誰よりも上手くなったのじゃ。

これで姫様にもつと色々な詩を聞いてもらえる。

そう言つて微笑んでおつた。

じゃがその翌年、母君が世を去られると、姫様は笑顔を失つてしまわれた。

ハイラルの姫として務めを果たさんとする姫様は泉での修行に注力し、安らかな時間を過ごされることはほとんどなくなつてしまつたのじゃ。

葬儀の場で毅然と母君を見送る姫様を見て、あやつは姫様の力になりたいと考えた。

以来、あやつは厳しい鍛錬を重ね、歴代で最も早くに《シーク》の名を継いだのじゃ。

琴の技も仮初の詩人とするには惜しいほどの腕を持つておつた。

戦う力も姿を隠す技も、当時の一族では並ぶ者がおらんかった。

そうしたあやつのは技は、すべて姫様の力となるために磨かれたものなのじゃ。

これでわかつたじゃろう。

あやつが生涯を賭け、其方を導く詩を残したその理由――。

それは、姫様をお救いするため。

己では叶わぬ願いを其方に託すためじゃ。

お一人で城に向かわれた姫様を見送り、無力を嘆くでもなく、其方に嫉妬するでもなく、自らにできることをなそうと、あやつは村を出たのじゃ。

その後、あやつがどこにおつたのか、我にはわからぬ。

古の勇者の足跡を辿る。そう言い残して去つたあやつは二度と村には戻らんかつたでな。

じゃが、一つだけはつきりと言えることがある。

あやつが為したあらゆる事柄は、ひとえに姫様をお救いするためのことじゃとな。

リンクよ。

其方の道行は、あやつが示し、そして願つた末のものでもあると。

ほんの少しでもよい。覚えておくのじゃぞ。

Requiem

おや？ あなたですか。

心なしか、顔つきが一段と凛々しくなられたような……。

《シークの事情がわかった》

——……師匠と姫様の間にそんなことが。

……そうだったのですね。

師匠、あなたはそのような想いをずっと……。

失礼しました。取り乱してしまいました。

では、私の方も聞いてください。

何度かお話した 私の師匠の未完の詩。

その重要な章を、ついに私、完成させる事ができたのです！
この高台こそは、その詩を詠うのにまたとない場所。

それは今から100年前。

あれに見えるハイラル城での出来事。

選ばれし六名を任ずる荘厳なる儀式。

では、お聞きください。

『英傑たちの詩』バラッド

やっぱりこういう堅苦しいのは向いてねえな。

フン……。これがシーカーストーンね。

それには様々な機能が備わっている筈なんですが、残念ながらまだ殆ど解明出来ていなくて。

この前、御ひい様に見せてもらったけどさ。

それ、本物みたいな絵が作れるんだよ。

すごい……。見てみたいな。

姫様、あの……。お願いしてもいいかな？

うん、じゃあその辺で写そうか。

みんな、シーカーストーン見て。

ダルケル……。もうちよつとかがめない？

あんた只でさえデカイんだから。

表情暗いよ、姫さま。もつと笑って。

リーバル、もつとこつち寄って。

やれやれ……。

ミファアー緊張しすぎ。深呼吸してごらん。
はいっ……。

じゃ、写すよ。

みんな、こつち見て。

笑ってー……。

チエツキー♪

この時より、彼らは英傑と呼ばれるようになったそうです。

情景が浮かぶような詩を作りなさいと私の師匠はよくおっしゃっていました。

今回の旅で、その言葉の意味が理解できたような気がします。

……ところで 師匠の資料を調べていたらこんなものが見つかったのです。私、思いました。これはあなたにお持ちいただくべきだと。あなたのその凛々しさは英傑たちの志を偲ばせてくれます。師匠亡き今、これをお渡しできるのはあなたを置いて他にいません。

《どういふこと?》

——……思い出したのです。

ある日、床に臥せっていた師匠がうわ言で呟いていたことを。それは師匠にとつて何よりも大切な思い出なのだと思います。病に侵されながら、尚穏やかな微笑みを浮かべていたのをよく覚えています。あなたに師匠の足跡を辿って頂いたおかげで、あの言葉の意味がわかりました。

……実はもう一つだけ、あなたに聞いていただきたい詩があります。

これは私が師匠の功績を伝えたいと思いついて作っていた詩です。

師匠から伝え聞いた話や、あなたから伺った話をもとに作っていたのですが、今、あなたから最後のお話を聞いて、欠けていた重要な章を思いつくことができました。

どうか聞いてください。

今も厄災を城に封じている姫様。

試練を乗り越え、厄災に挑む騎士殿。

あなたの方の力となり、見守る四人の英傑たち。

そして――。

希望を未来へと繋いだ、もう一人の『名もなき英傑の詩』を。

時の流れは 残酷なもの

人それぞれ 速さは違う

そしてそれは 変えられない

時は流れても 変わらぬもの

それは 幼き日の追憶

時は移り 人も移る

水の流れにも似て とどまる事はない

幼き心は 気高き大志に

幼き恋は 深き慈愛へ

澄んだ水面は 成長をうつす鏡

時を経て 結ばれし意志

己が届かぬ 願いのために

目覚めし希望へ 道を示す

闇を払い 光を取り戻せと

秘めし祈りは その先に

『お待ちください！』

『本当に、一人で行かれるおつもりですか！』

『シーク……』

はい。リンクが目覚めるまでの間、なんとしてもガノンを留めておかなくてはなりません。

『そのためには、私の封印の力が必要なのです』

『それは……』

『ですが、お一人で行かれるなど危険すぎます！ どうかぼくも共に……』
『ありがとうございます。ですが大丈夫です。』

私は長い間、封印の力に目覚められず、ずっと修行を続けてきました。

その苦労は、決して無駄ではなかった。今なら、それがわかります』

『ゼルダ様……』

『心配してくれてありがとうございます。』

『ですが、私なら大丈夫です』

『……そうですね。』

貴女はずっと努力を続けてこられた。

きつと、母君もお喜びになられていると思いますよ』

『シーク……？』

あなたは一体……』

『お覚悟、しかと承りました。

ならばせめて、その道行みちゆきに詩を捧げさせてください』

『え、ええ……。わかりました。

あなたの詩は私も好きですから。ぜひお願いします』

『かしこまりました。

では——この詩を』

女神のしもべに 導かれし若人

空と大地を結び 光もたらず

若人 2つの大いなる羽を

光の塔に導く 彼の者の前に

道はひらけ 詩の響きを聞く

『これ……』

『この詩は、もしかして……』

『ゼルダ様。』

『貴女はぼくにとって輝く光、女神そのものでした』

『……そう、なのです。』

『あなたはずっと……』

『ごめんなさい。私はそのことを……』

『構いません。』

『ぼくの願いは、あるときからずっと、貴女が笑顔であれることです。』

『……わかりました。では、一つだけお願いがあります。』

『インパの家に置いてきた写し絵——みんなで写したあの絵を、預かって欲しいので
す』

『承知しました。』

貴女がお戻りになる日まで、大切に預かせていただきます』

『ええ。よろしくお願ひします。』

……………じゃあ、そろそろ行きますね』

『後のことはお任せください。』

彼が目覚めるまで、必ずやこの国を守り抜いて見せます』

『ありがとう。』

あなたのことは、もう決して忘れません』

師匠は、亡くなる間際に呟いていました。

『女神よ。貴女にお仕えすることが、ほくの何よりの喜びでした』と。

あなたのお話を聞いた今、師匠の祈りの本当の意味がわかりました。

聞いてくださってありがとうございます。
これで、あなたへ伝えるべき詩は全てです。

ハイラルを見守りし英傑たちの魂に安らぎあれ。